女探偵眞由美の誘惑事件簿

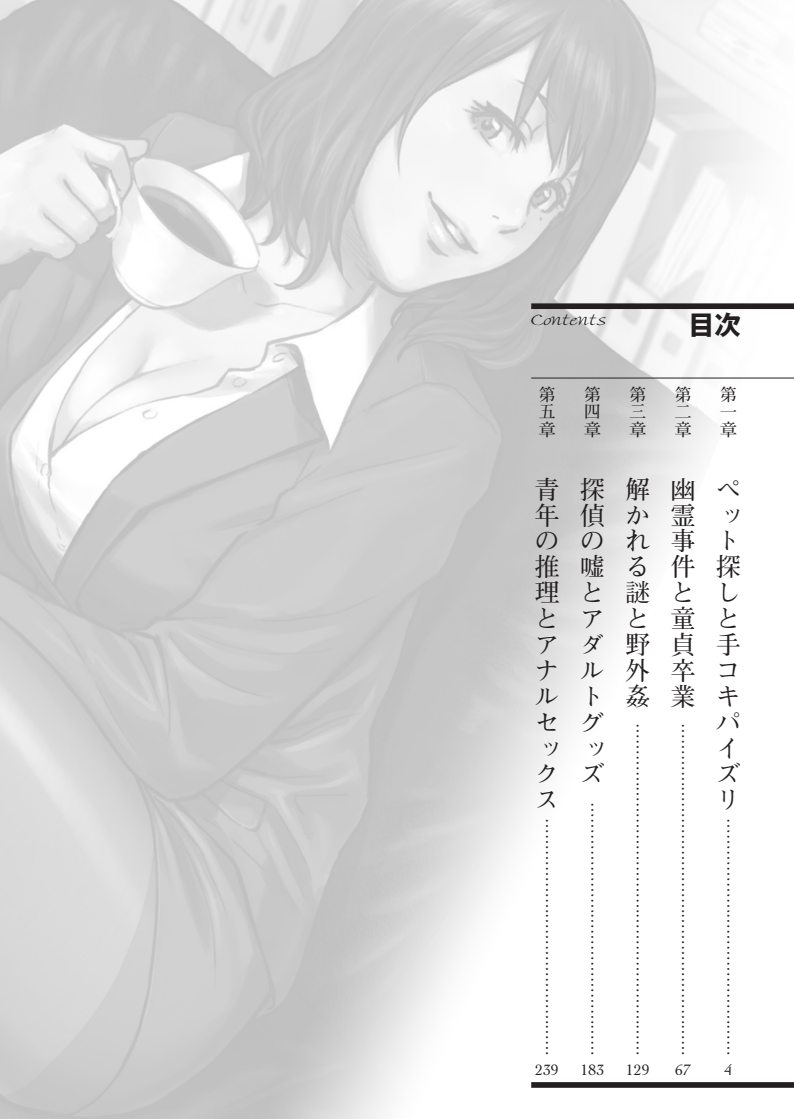
ゆうわくじけんぼ

伊吹泰郎

挿絵／AZASUKE

試し読み版

リアルドリーム文庫



Contents

目次

第一章　ペット探しと手コキパイズリ……4
第二章　幽霊事件と童貞卒業……67
第三章　解かれる謎と野外姦……129
第四章　探偵の嘘とアダルトグッズ……183
第五章　青年の推理とアナルセックス……239

登場人物 *Characters*

玉村 眞由美
(たまむら まゆみ)

雑居ビルに事務所を構える探偵。元は将来を嘱望された弁護士だった。垂れ目、泣きボクロ、少し厚みのある唇が色っぽい都会的な美人。凛々しくも優しい性格。

吉尾 正太郎
(よしお しょうたろう)

弁護士を目指して法学部に通う二十一歳。がっしりした体格の、真面目な好青年。

第一章　ペット探しと手コキパイズリ

秋と呼ぶにはまだまだ暑すぎる、九月中旬の陽気に包まれながら。

吉尾正太郎はバイト用の履歴書を携えて、東京都の井出坂にある古ぼけた雑居ビルを訪ねていた。正確には、ビルの三階にある『玉村探偵事務所』を。

――探偵の事務所。

そんな怪しい場所と、学生の内から縁が出来るなど、彼も先日まで考えていなかった。

正太郎は弁護士を目指して上京し、江蘭大学で勉強中の二十一歳だ。ちなみに現在は、大学の寮住まい。

高校まで弱いながらも柔道部に所属していたためか、多少はガッシリした身体つきだが、見た目は平凡な方だろう。

その彼が、初めて足を踏み入れた探偵事務所は、グレーがかった壁やスチールラック、さらに安っぽいボロソファーのせいで、全体的に寒々しかった。一月後には潰れていたっておかしくない。

にもかかわらず――。
部屋の主である玉村眞由美は、眩いほどの存在感を放っていた。
「そう……吉尾君、今は江蘭大学の法学部に通っているのね。しかも、柔道の心得有りと。なかなか頼もしそうね」
眞由美は、正太郎が今までロクに会話したことがない都会的なタイプの美人で、非常に色っぽかった。
たとえば、端の垂れ気味な瞳が色っぽい。目尻の泣きボクロも色っぽい。
少し厚みのある唇も色っぽいし、履歴書を持つ長い指も、セミロングの髪も――。
それでいて、育ちの良さそうな気品まで漂っている。
彼女を前にした瞬間から、青年の心臓は高鳴りだし、頬も火照った。そしてローテーブルを挟んで向き合うと、喉はカラカラに干上がってしまった。
密室に二人きりとはいえ、初対面でここまで調子が狂うなんて、自分でも変だと思う。
ある『特殊な事情』による緊張からか、とも思ったが、多分違う。
もしかして、彼女ほど綺麗になると、妙なフェロモンを出せるようになるとか――。
（……って、そんな妄想、余計に馬鹿げてるだろ）

女探偵の身長は少し高めで、バストに関しては発育過多だ。Eカップか、あるいはFカップ以上あるのか、ライトグレーのスーツの胸元を柔らかそうに盛り上げ、ともすればボタンを弾き飛ばしそう。

逆にウエストは流麗に括れて、ラインに沿った衣類がコルセットさながらに見えた。そのくせ、しなやかな健康美も存分に発揮されている。

ヒップまで下れば、またふくよかな丸みが描かれていた。

眞由美が穿くのは、上と揃いのスカートだ。タイトに肢体へ密着し、匂い立つような女らしさを浮き上がらせる。脚はストッキングが包み、脹脛の曲線まで悩ましい。

――と、計ったようなタイミングで、眞由美が悪戯っぽく目を向けてきた。

「探偵事務所の仕事は、浮気調査やストーカー対策といったものよ。アルバイトとはいえ、人の黒い面を色々見るかもしれないし、依頼人に対する誠実さが求められるわ」

「は、はいっ……。元々、弁護士を目指していますし……っ、大丈夫ですっ」

「でも、逆に法学部じゃ、毎日の勉強が大変じゃない？」

「う、その……そ、それなりにはこなしています。問題ありません……っ」

「それなりってどれぐらい？」

「え？」

目を瞬かせると、眞由美は気安げに微笑んだ。
「曖昧な返事は、面接だとマイナスよ？　リラックス、リラックス。ありのままの吉尾君を見せてね？」
純朴な青年とのやり取りを、楽しんでいるかのようだ。
だが正太郎としては、絶対に『ありのまま』を見せるわけにはいかない。
なぜなら、ここの面接を受けることになったのは、『特殊な事情』――ある人物から一方的に指示を出されたためで。
青年はスパイとして、不本意ながら、この事務所へやってきたのだ。

それは三日前のこと。
「君に頼みがあるんだ」
差し向かいでソファーに腰を下ろす白髪の紳士から、笑顔で切り出された時点で、正太郎はピンとこないながらも不吉な予感が強かった。
紳士の名は、源元英雄（みなもとひでお）。江蘭大学で法学部の学部長を務めており、法曹界にも顔が広い。つまり、学生である正太郎の生殺与奪を、ほぼ握れる人物なのだ。
パッと見、穏やかで知的な英雄は、しかし中身が相当な古狸であると、学生の間で

も悪名高かった。
　そんな彼から、正太郎は講義が終わった後で呼び止められた。そして学部長室に連れてこられた。どんな呑気者でも、緊張せずにいられない状況だろう。
　しゃちほこばる教え子へ、英雄はおもむろに告げてきた。
「噂で知ったんだが、吉尾君はまあまあ腕っぷしが強いらしいね？　それに講義を受ける態度が、今時珍しいほど真面目だ。そこで法学部に属する学生の中から、僕は君を選んで、声をかけたんだよ」
　褒められるほど、不安が高まる。相手の笑顔も、悪だくみ故に思えてくる。
　待っているのが落ち着かなくなり、正太郎は催促してみた。
「それで……頼みというのは何でしょうか？」
「うん。君には、僕の姉の娘……つまり、姪の事務所で働いてもらいたい。とりあえずは来月の末までね」
「え？」
「姪は玉村眞由美といって、かつて将来を有望視される弁護士だったんだ。が、ある日一大決心をして、誰にも相談せず、職を変えてしまった。何もかも捨てて就いた仕事は、なんと探偵の見習いだ」

三流ドラマのあらすじみたいである。教授もそこで僅かに苦笑するが、話は澱みなく進めた。

「新しい職場で必要な技術を身に着けた後、姪は独立して個人事務所を開いた。親戚一同、どう遇するべきかで迷っているよ。不祥事を起こされても困るしね。そこで僕はどんな仕事ぶりか探ろうと考えついた。姪はちょうどバイトを募集中なんだ」

「……つまり俺……いえ、自分にスパイをしろということですか？」

「その通り。首尾よく潜り込むことが出来たら、定期的に状況を教えてほしい」

そんな役どころ、正太郎は御免だった。探偵の助手なんて、剣呑なトラブルに出くわすかもしれないし、時間も拘束される。第一、自分にスパイの真似事が出来るとは思えない。

「面接で弾かれたらどうするんですか？」

角の立たない逃げ道を探してみるが、法学部の狸は動じなかった。

「その時は別の方法を考えよう。どうだろうね。引き受けてくれるなら、姪からのバイト代と別に、僕も謝礼を払おう。結構な稼ぎになるよ？　それに、だ」

英雄はニンマリ口の端を上げた。

「前回の小論文が、可と不可の間で揺れている君にとって、この仕事は社会勉強にな

ると思うんだが？」
嘘だ。その小論文はきちんと下調べして書いたし、自己評価も低くなかった。
パワハラです、と抗議したいのを、正太郎はギリギリで飲み込む。学部長と言い争っても、勝てる望みはない。
「……分かりました。やってみます」
結局、それが青年の返事だった。

以上、回想終わり。
正太郎は動悸が速まるだけと自覚しつつも、改めて目の前の女性を見てみた。
玉村眞由美の実年齢は不明だ。英雄は教えてくれなかったし、正太郎も異性に疎いから、見当をつけにくい。
顔立ちは若々しく端整なのだが――。
（源元教授から聞いた経歴だと、まだ二十代ってのは、無理があるんじゃないか？）
まさか、三十代半ばなんてことは――。
脳裏をかすめる無礼な想像を、正太郎は慌てて打ち消した。
と、眞由美が立ち上がる。

「そうだわ。前にもらったお菓子があるの。それを食べながら、話しましょうか」
返事も待たず、パーテーションで区切られた給湯室の方へ歩いていく彼女。正太郎が目で追えば、引き締まったヒップラインが誘うように左右へ揺れていて――駄目だ。意識して顔を背けなければ、凝視してしまう。
（どうしたんだ、俺は！　こんな軽薄男じゃなかったはずだろう！）
青年が悶々としているうちに、眞由美はクッキーの缶を持って戻ってきた。そしてさっきと同じ場所に腰を下ろして、蓋を開ける。
「遠慮なくどうぞ」
「い、いただきます……」
フレンドリーに勧められ、正太郎はぎこちなくクッキーを取り上げた。それを口に入れた瞬間、眞由美から質問が来る。
「で、源元教授の様子はどう？　お元気かしら？」
――いきなりバレた⁉
不意打ちに咽せかける。とはいえ、すぐ気付いた。履歴書を見せた以上、学部長である英雄の名前が出てもおかしくないはずだ。
これはカマ掛けだろう。

クッキーを塊のままで飲み下し、青年は白を切ることにした。
「そうですね？　ええ、元気ですよ？」
しかし、眞由美もニコニコ笑いながら、追及を緩めない。
「そこまで動揺したら、ごまかしても手遅れじゃないかしら。君は源元教授に言われて、私を監視しに来たんでしょう？」
「……っ」
核心へズバリ切り込まれ、もはやいくら考えても、突破口は見つからなかった。
「は、はい……。姪の仕事を手伝いながら、定期的に状況を報告しろと言われました」
観念して頷く正太郎。ただし不安も大きい。
もしも眞由美が『余計なことをするな』と学部長に怒鳴り込めば、単位すら危うくなるのだ。
幸い――次のセリフまでに間は空いたものの、相手は表面上、にこやかなままだった。
「……。どんな目的だとしても、叔父様へ文句は言いにくいわね。あ、叔父様は――」
そこで彼女の目線は、スッと出入り口のドアへ移される。

「……君、どうしたの？　何かご用かしら？」
今までと違い、純粋に優しい口調だ。つられて正太郎もドアを見た。
すると、思いがけない展開。
小学校中学年ぐらいの少年が一人、事務所へ不安げに入ってきていたのだ。平たいバッグをランドセルのように背負い、出で立ちはごく普通のシャツに半ズボンという組み合わせ。
背丈は多分、平均ぐらいだろう。だが、全体的に線が細い。ビクビクした物腰のせいで、余計に弱々しく感じられるのかもしれない。
急に年上二人から見つめられ、少年は身を竦ませかける。それでも、どうにか踏みとどまり、高めの声を張り上げた。
「あのっ、た、玉村先生はいらっしゃいますかっ？　お願いしたいことっ、あって、来ましたっ！」
「玉村は私よ？」
眞由美が軽く手を挙げて応じると、少年は即座に頭を下げる。
「先生っ、シレを……逃げた犬を探してくださいっ。僕は野呂創（のろはじめ）っていいます！　自分でも探したけれど見つからなくて……だ、大事な家族なんです！　お願いします！」

正太郎はある意味、単純なタイプだ。事務所から追い出されかねない立場でありながら、この少年が可哀相になってきた。
探偵事務所なんて非日常めいた場所へ、子供が一人で来るなど、相当な勇気が必要だったろう。加えて、今にも泣きだしそうな必死さ。
きっと、もう他に手段が思い浮かばないのだ。
思わず眞由美を見れば、彼女と視線がぶつかった。
こちらの内面を確かめるような表情だ。息の止まりそうな緊張感が、正太郎の身を走る。
だが、眞由美はすぐに小さく微笑み直した。
「吉尾君、席を一回、私の隣に移して」
「え？」
「そこはお客さんのための場所だもの。君はバイトに採用されないと困るんでしょう？　お給料とか勤務時間とかの細かい話は、後で決めるから……そうだわ、これからは私を所長と呼ぶように、ね？」
「っ……はいっ」
正太郎は弾かれたようにソファーから立つ。

ますます厄介な板挟みとなってしまったが、こうなったら、なるようにしかならない。

何度も試合に臨んでは負けた経験から、土壇場での腹の括り方だけは、無意識に覚えている正太郎だった。

正太郎は眞由美と並んで、小さな依頼人から話を聞くことになった。

隣からは、女らしい甘やかな香りが漂ってくるが、努めて正面へ意識を集中する。

「あの……これが探してほしい犬なんです」

創は落ち着きのない手で、さっきまで背中にあった鞄から、一枚の紙を取り出した。

覗き込んでみれば、それは時々、街中で見かけるような張り紙だ。『迷子の犬を探しています』という見出しの下に、柴犬の写真がカラーで印刷。さらに性別や大きさといった特徴、見つけた時の連絡先も、列挙されている。

「これ、君が作ったの？」

眞由美に聞かれて、「はい」と遠慮がちに頷く創。

「よく出来ているわね。ちゃんとシレ君の特徴が伝わってくる」

今にも頭を撫でんばかりに褒められて、少年はモジモジ俯いた。

眞由美の態度は穏やかで、さながら保育士か学校の先生だ。さっきまで翻弄されていた正太郎ですら、本当は優しい人なのではないかと思えてくる。
きっと相手の人柄を瞬時に見極め、適切な対応を出来る人なのだろう。
（……さすがプロだ……）
素直に感心させられた。
その間にも、眞由美は質問を重ねていく。
「逃げ出した時の状況を教えてくれる？」
「それが……その……」
何故か困ったように言いよどむ創だが、眞由美に「ん？」と柔らかく促されて、
「ええと……散歩中、近所のボス猫に吠えられて……それで驚いたみたいで、僕が持ってたリードごと、道の向こうへ走っていっちゃって……」
少年に悪いと思いつつ、正太郎は冗談みたいなその光景を想像してしまった。一方で眞由美は、巧みに内心を隠している。
「……分かったわ。私とこっちのお兄さんで、探すのを手伝ってあげる。この張り紙、私達も使うから、一枚ちょうだいね。それと連絡先のところを、探偵事務所に書き換えて良い？」

「は、はいっ！」
すがるように少年の顔が上がった。そこへブレーキをかけるように、人差し指を立てる女探偵。
「でも、必ず見つけるという約束までは出来ないの。後、探偵は仕事だから、お礼をもらわなくちゃいけないわ」
「それって幾らぐらい……でしょうか？」
「ここへ来ること、ご家族とは話した？」
「ごめんなさい……。まだです」
「じゃあ、まずは話すこと。それから、みんなで決めましょう？」
「分かりました。明日、お母さんを連れてきます！」
創はピョコンと立ち上がり、大きくお辞儀した。

少年を廊下へ送り出した後、ドアを閉めた眞由美は、「さて」と正太郎へ向き直る。
正太郎も席を立って、彼女と並んでいたところだ。女探偵との身長差はおよそ十一、二センチで、さっきよりずっと近い上目遣いに、一層ドキリとさせられる。
彼が棒立ちになったその横を、女探偵はすり抜けるように、ソファーへ戻った。

「次は君との相談ね。聞いておきたいんだけど、源元教授は一体どんなお礼を約束したの？」
「それは……」
正太郎は再び女探偵と向き合う形で腰を下ろし、学部長室でのやり取りを正直に答えた。
「うーん、手強いわね。といって、不利な情報なんて、流されたくないし……」
「そんなつもり、俺はないですよ。無事に卒業できれば十分です」
しかし、青年の甘ちゃんなセリフはスルーされる。
「こういうのはどうかしら？　お給料は既定の通り。ただし仕事がない時は、私が勉強を見てあげる。これでも一度は弁護士になった先輩だもの。君にアドバイスできることは多いはずよ」
思ったより普通の内容で、正太郎もホッとした。英雄と張り合って、妙なことを言い出すのではないかと、少し心配だったのだ。
と思ったのも束の間、妖しい付け足しが来る。
「プラス。働き次第では、大学で絶対にしてくれない、ひ・み・つのお勉強もね？」
ソファーから身を乗り出し、ローテーブルへ両手を置く眞由美。

前屈みの姿勢になると、胸の大きさは殊更に強調された。襟元では、ブラウスの第一ボタンが最初から外されており、深い谷間まで覗けそう。血が通う肌の丸みと色艶は、曇りない布地の白さが霞むほど蠱惑的だった。

正太郎は無意識に、そこを直視してしまう。すぐ我に返って顔を逸らすが、これではいやらしい見方をしたと白状するようなものだ。

頬が赤くなったのを、眞由美も見逃さなかった。

「ほぉら……若き弁護士がハニートラップに負けるなんて、まずいでしょ？　そっち方面の経験も、色々積ませてあげる。私みたいのが好みじゃなかったら、他に可愛い女の子を紹介するわ。ね、悪くない案じゃない？」

眞由美の誘う声も目線も、子供を励ます時と別人。蜜のようにネットリと五感へ絡み付く。

（この綺麗な人と……俺が!?）

正太郎は一度に体温が高まり、その熱は股間部へ殺到した。ズボンの下で、ムクムクと男根が太くなりかけ――。

だが、同時に胸を締め付けられる。

なんというか、このミステリアスながらも母性溢れる女性には――そう、下品な誘

いをかけてきてほしくなかった。
理想像の押し付けだとしても、尊敬できる人生の先輩であって欲しい。
次の瞬間、青年は自分が異常に緊張する、一つの理由を閃いた。
（ひょっとして一目惚れか⁉　俺はこの人を好きになってるのか⁉）
異性経験が皆無の身に、眞由美の美貌は、劇薬同然だったのかもしれない。
「か……考えておきます！」
まだ、この原因が正解かどうか不明だ。
それでも混乱を払いたくて大声を張り上げると、眞由美はあっさりソファーへ座り直した。
「よしよし。それと仕事に来てもらう曜日は――」
彼女の態度は一変し、ごく普通に採用の相談をする経営者のものへ。
（からかわれたのか……？）
こんな底の知れないタイプに惹かれても、苦労が多いだけに決まっている。頭ではそう分かるのに、気持ちを切り替えられそうにない。
正太郎はドッと疲れを感じ、だが、おかげで勃ちかけた股間も鎮まった。
勤務に関する彼の要望は簡単に受け入れられ、通うのは基本的に月、水、金、土の

午後か夕方からで、忙しい時は要相談と決まった。
「じゃ、書類を用意するから、目を通して記入もよろしくね。でも、せっかくだし、手伝いは今日からにしてもらおうかしら」
「え、何をするんですか……？」
一緒に仕事をするとなると、今日はまだ平静でいられないかもしれない。
身構える青年へ、眞由美はサラリと言った。
「当然、さっきの子の犬探しよ」
「……え？　まだ正式に依頼を受けた訳じゃないのに？」
「探してあげるって約束なら、もうしたでしょ？　しかも逃げ出したのが、何日も前よ。のんびりはしていられないわ。どっち道、親御さんが渋ったら、お小遣い価格で受けてあげるつもりだしね」
「なら、今日のうちにそう言ってあげれば良かったじゃないですか」
あんな子供なんだし――との思いで、正太郎。
しかし、「駄目よ」眞由美は即答だった。
「これは仕事だもの。最初から特別扱いしていたら、この先に支障が出かねない。それに甘すぎるのは、あの子のためにもならないわ。……という訳で、お喋りはここま

で」
ポンと両手を打ちあわせる眞由美。そういう仕草は妙にあどけない。
「探偵も、特別な犬の探し方を知ってる訳じゃないの。まずは警察と保健所へ問い合わせ。次にローカルなＳＮＳで情報拡散。後は野呂君がやったみたいな張り紙を、範囲を広げて張っていきながら、時間の許す限り、人へ聞いて回るしかないわね」
それは思っていたより、ずっと地道な作業だった。

この日の残りは、半径数キロにわたって、めぼしい家や店で張り紙の許可をもらううちに終わった。
「……今日はこれぐらいにしておきましょう。吉尾君、初仕事、お疲れ様でした」
「いえ、これからもよろしくお願いしますっ」
外の空気を吸ううち、正太郎も雇い主の色気へ馴染めてきた。気持ちはまだ整理できないが、この調子なら、次の出勤日にはもっと自然体で振る舞えそうだ。
「……シレ、見つかるといいですよね」
夕焼け空の下を探偵事務所へ戻りつつ、しみじみと述べる青年へ、眞由美はただ曖昧な笑みを浮かべた。

小さい子供が悲しむ場面は見たくなかったが、成功率は必ずしも高くないのかもしれない。

だが、運が良かったのだろうか。

翌々日になると、庭に入ってきたシレを預かっているという電話が、探偵事務所へかかってきたのだ。

「これはまた……随分なところへ逃げ込みましたね」

連絡してきた相手――幼げな声で、井上瑠実（いのうえるみ）と名乗っていた――の許へ、眞由美と二人で出向いてみれば、そこは家というより『洋館』と呼ぶのがしっくりくる豪邸だった。

敷地は背の高い塀に囲まれ、その一角に鉄柵付きの門がある。柵の隙間は、人間では絶対に潜り込めないが、柴犬ならどうにか通れそうだ。

その門から前庭の奥へと、道が一本伸びていた。ただし、多種多様な木々に挟まれつつ、途中でカーブを描くため、奥までは確認できない。

目を上へ転じれば、屋敷の二階が見て取れる。空へ伸びあがる三角形の屋根と、石を組んで造られたバルコニー。どっちも正太郎が、二十一年の人生でお目にかかった

ことがない代物だ。
とはいえ、シレも遠くまで逃げていた訳ではない。創の家からここまで、山手線で三駅程度しか離れていないのだ。
門の脇、『井上』という表札の下には、クリーム色のインターホンが付けられていた。
そのボタンを、眞由美はさして動じた様子もなく、気軽に押す。彼女の装いは、今日も女物のスーツだ。
程なく、スピーカーから年配の女性の声が聞こえてきた。
「どちら様でしょう？」
「先ほどお電話いただいた、玉村探偵事務所の者です」
眞由美がよそ行き用の落ち着いた口調で答えると、「少々お待ちを」と告げられる。だが直後には、曲がりくねった道の向こうから、小さな影が飛び出してきた。
それは一人の少女だった。依頼人の創より若干年上らしく、豪邸にそぐわない、活発そうな半袖シャツと丈の短いパンツ姿。
インターホンを鳴らされる前から、正太郎達の姿を二階の窓越しに見つけて、矢のように飛び出してきたらしい。背中まである長い髪が、宙を舞うほどの駆け足である。
少女は門の前まで来るなり、急ブレーキ。鉄柵越しに、正太郎と眞由美を見上げて

きた。
「あんた達が探偵事務所の人？」
つり目がちな顔立ちは、後何年かすれば、美人になるかもしれない。しかし現時点だと、生意気さが目立っていた。
というより、眉をひそめ、唇はへの字で、あからさまに客二人を怪しんでいる。
「……なんか胡散臭いわね」
はっきり口にまで出してきた。
そこで正太郎は気付く。ジロジロと無遠慮な目は、正太郎よりも眞由美へ強く向けられているのだ。——女性というのは、子供の内から、色っぽい同性に厳しめなのかもしれない。
「はじめまして、玉村探偵事務所の玉村眞由美です。こちらは助手の吉尾正太郎」
眞由美は刺々しい視線など微塵も気付いていない素振りで、にこやかに挨拶した。併せて名刺を少女へ差し出す。
「……ふん」
仏頂面でそれを受取った少女は、最低限の礼儀を果たすように「井上瑠実よ」と名乗った。

「じゃあ、あなたが電話をくれたのね？」
「そうよ」
「シレ君を預かってるって」
「ええ」
一々、返事が素っ気なく、門を開ける気配すらない。
眞由美の方も、少し困惑気味に首を傾げた。
「ええと……シレ君に会わせてくれる？」
「条件があるわ」
ビシリと強気に瑠実。
「あたしをシレの飼い主のところまで案内して。シレを守れるヤツかどうか、あたしが確かめるから」
しかし、眞由美は温和な口ぶりながら、きっぱり答える。
「……ごめんなさい。探偵は、依頼人の個人情報を明かしちゃいけないのよ」
「！　だったら、あたしもシレに会わせてあげない！」
（……気難しい子だなぁ）
正太郎が胸中で嘆息すると、眞由美が場違いに軽く肩を叩いてきた。

「吉尾君、バトンタッチ。後は任せるわ」
「え、ええ!?」
「だって私が話しても、怒らせるだけだもの。大丈夫、大丈夫。責任は私が持つから」
「責任って、そんな簡単に……」
無責任な雇い主だ。
とはいえ、ここで押し問答を始める訳にはいかない。正太郎は身を屈めて、瑠実と目線の高さを合わせた。
「な……何よっ？」
初対面の男に顔を寄せられて、彼女も怯んだらしい。虚勢を張るように声を硬くされ、正太郎も急ぎすぎたと気付く。だが、座ったり立ったりしていたら、それこそ不審者だ。仕方なく、その姿勢のままで瑠実を見つめた。
「井上さんは、本気でシレを思いやってるんだな？」
「……そうよ！　あたしだって、シレと仲良しなんだからっ。シレの将来が心配なの！」
「でも元の飼い主がどれだけ悲しんでるかも、俺達はこの目で見てるんだ。その子のもとへ、早くシレを連れて行ってあげたい。……俺達にシレを任せてくれないか？」

「嫌よ！　全然答えになってないじゃない！」
ますます苛立つ少女。どうやら言葉だけでは、どんなに頑張っても逆効果らしい。
正太郎は必死に頭を回転させた。創の身元を明かさず、シレが幸せになれると納得してもらうには――。
「なら、こういうのはどうだ？　井上さんが満足するまで、俺が定期的にシレの写真を撮って、見せに来る。それで元気がなくなってると分かったら、俺も井上さんに味方する」
所長から丸投げされたのだ。素人が思い付くやり方でいくしかない。
「そんな適当なこと言っても、あたしは騙されな――」
「約束するよ」
「っ……」
本気だから、声には力が籠る。
瑠実は吟味するように黙り込んだが、やがてふてくされたような態度のまま、門の掛け金を外した。
「その言葉、忘れないでよねっ」
言い放ち、先導するように元来た道を歩きだす。

正太郎も後へ続き――そこで眞由美が耳打ちしてきた。
「飼い主の了解も取らないで、思い切った約束をしちゃったわね」
詰る口調ではない。むしろ奮戦ぶりを気に入った様子だ。
だが、涼やかな声に不意打ちで鼓膜を撫でられると、純な青年は焦ってしまう。
――ひ・み・つ、のお勉強もね――そんな誘惑まで脳内再生された。
「……ま、まずかったですか？」
「いいえ。謝るのは私の方よ。君がどんな風に説得するか、ぜひ知りたかったの」
要するに、交渉力を見定めるテストだったのだろうか。
だが、気を取り直してそれを問おうとしたところで、瑠実がボソリと言った。
「ほら、あそこ」
多分、シレが逃げ込むまで『空き家』だったのだろう。洋館の裏手、少女の指差す先に、青い屋根の古ぼけた犬小屋があった。
「シレは中よ」
教えられて、正太郎は慎重に犬小屋へ近づき、中を覗き込む。
「お……」
居た。張り紙で見た通りの茶色い柴犬だ。

しかし、嗅ぎ慣れない人間の匂いで警戒したか、シレは壁へぴったり身体を付けて、威嚇するように唸りだしていた。
「……おおい、元の飼い主のところへ連れて行ってやるぞ？　だから安心して出てこーい」
宥めるように声をかけたが、むしろ唸り声は不穏に低くなる。迂闊に刺激を続けたら、逆ギレで噛みつかれかねない。
「……どうします？」
正太郎が溜息混じりに眞由美を見上げると、瑠実が遮るように胸を張った。
「ほら邪魔。どいてよ」
彼女は正太郎を押しのけて、小屋の前で身を屈める。
「平気よ、シレ。出て来なさい」
小さな手を気弱な犬へ差し伸べ、催促するように上下。と、まるで言葉が通じたように、シレはおっかなびっくり這い出てきた。
一週間足らずのうちに、両者はすっかり打ち解けたらしい。
「……驚いたな」
「すごいでしょ？　これって、あたしが飼い主のところへ連れてくしかないんじゃな

い？」
偉そうに鼻を鳴らした少女は、小屋の脇に立ててあった杭からリードを外して、片手に握った。一緒に行く気満々だ。
だが、女探偵も動じない。
「次は私が試してみるわ」
言って、バッグから犬用のジャーキーを取り出す。それがシレの大好物なのは、すでに飼い主の創から聞いてあった。
そうして膝を曲げてしゃがみ込めば、
「……!?」
ムッチリした太腿どころか、タイトなスカートの中まで、正太郎の位置から見えかける。
青年がギョッとたじろいでいる間に、眞由美は瑠実がやったのと似たリズムで、ジャーキーを振り始めた。
「シレ君っ、おいでおいでっ」
呼び声はハキハキと明るく、正太郎よりずっと犬の扱いが得意そうだ。
「ふん。そんなものにシレは――」

対抗心むき出しで瑠実も言いかけるのだが、当のシレは逡巡するような間を置いた後、女探偵へ慎重に近づく。そしてジャーキーをパクリ。

すかさず眞由美が梳くように毛並を撫でると、安心できたのか、地面へお腹を付けて、肉をのんびり味わいだした。

瑠実は友達に裏切られた気がしたらしい。

「くっ……わ、分かったわよ！　だったら早く連れてっちゃえばいいじゃないっ！」

大声で怒鳴るや、女探偵が呼び止めようとするのも無視して、屋敷の表の方へ走っていってしまった。

顔を伏せていたのは、悔し涙を隠すためかもしれない。

「どうしましょうか？」

正太郎は、自分が悪者みたいに思えてくる。このまま終わらせるのは、後味が悪かった。

眞由美も少し反省気味で、

「屋敷の人には挨拶しないといけないわね。でも、井上さんは無理に呼んでも、ヤブヘビになりそうだわ。後で改めてお礼に来ましょう」

「……それが無難かもしれませんね」

ひとまず、シレと創を引き合わせる方を優先することになった。

野呂創の家は、建てられて間がなさそうな、小さい一戸建てだった。

そしてシレを見るなり、創は幼い顔を嬉し泣きでクシャクシャにして、大事な家族へ抱きつく。頬ずりまでする。

「良かった！　シレ、お帰り！　お帰り！　もう迷子になんてさせないからねっ！」

最初は驚いて身を捩りかけたシレも、すぐ懐かしい匂いで安堵したように、短く丸まった尻尾を振りだす。

「親切な人が、シレ君を見つけて世話してくれていたのよ。それでね……」

瑠実の身元を伏せたままで事情を説明すると、創と彼の母親も、写真撮影の許可を出してくれた。

そんな訳で、少女との間にしこりは残ってしまったものの、正太郎にとっての初仕事は、どうにか成功に終わったのである。

「めでたしめでたし、ですね」

探偵事務所に戻った青年は、ボロソファーに片手を置きながら、満足感を噛みしめた。

眞由美の方も、肩の荷が下りた雰囲気だ。
そんな彼女へ、正太郎は先ほど中途半端になった問いを、もう一度したくなる。
「所長はさっき、俺がどんな説得するか知りたかったって言いましたよね。あれ、採用試験みたいなものだったんですか？」
すると眞由美は静かに首を横へ振り、
「違うわ。君なら真っ直ぐな答えを出しそうって、私、勝手に期待していたの」
「……はい？」
どうしてそこまで買ってくれたのだろう。雇われて、実質まだ二日目なのに。そもそも、最初はスパイとしてここへ来たのだ。
疑問が顔へ出やすい青年に、眞由美は微苦笑を浮かべた。
「自覚がないのね、吉尾君。私が君を雇った決め手は、その真っ直ぐさなのよ」
「えっ？」
「ふふっ。犬を探してって依頼が来た時、君はね……」
一歩、二歩と距離を詰めてから、女探偵が照れくさそうに見上げてくる。
「会ったばかりの男の子を助けたくてしょうがないって、そういう顔をしていたんだから」

ものすごく恥ずかしいことを言われた気がして、正太郎は頭へ血が上った。頬の熱は面接時さえ軽く超え、立っていたらよろけそうだ。

そのタイミングで、眞由美から囁かれた。

「私、君には真っ直ぐなままの弁護士へ育ってほしい。だからこそ……異性に対処するための指導、私にさせてくれないかしら？」

「ぁ……う……えっ……」

「どう、かしら？」

衝動的に口を開けたところで、さらに身を寄せられて。とうとう正太郎は首を縦に振ってしまった。

自分がどう動いたか悟ったのは、一呼吸置いた後だ。

ますます全身が火照ってくるものの、取り消す気にはなれなかった。

恋愛感情とは別ベクトルだが、眞由美は自分を認めてくれている。その上で求められたのだと思うと、最初に迫られた時のような胸の痛みを感じない。

そして断言できる。やはり自分は、この年齢不詳の美女に一目惚れしていたのだ。

「じゃあ吉尾君、ソファーに座って？」

「何を……するんですか？」

聞く間にも期待と緊張が高まる。
「それは座ってからのお楽しみ」
教えてもらえないことに歯痒さを覚えながらも、青年はつまずきそうな足取りで指示に従った。
その間に眞由美は、事務所のドアに『外出中』のプレートを掛けて、施錠も済ませた。青年の前に戻り、ローテーブルの位置をずらして場所を開けると、ストッキングに包まれた両膝を、床へ降ろす。
「……誰かにここを触られたことって、ある？」
彼女がそっと白魚のような指を置いたのは、正太郎のズボンのど真ん中。下では早くもペニスが半勃ちとなっていた。
布地に出来た膨らみは、すでにごまかしようがないほど大きい。感度も上がって、そっと触られるだけで、神経へ鈍い痺れが割り込んできた。
「うっ⁉」
正太郎は身を硬くしてしまう。強張った首を横へ振れば、
「ふふ、思った通り。すごく初々しいものね……」
眞由美は赤らみかけた目元を淫靡に細め、指先を微かに走らせ始めた。まるで刷毛

でイタズラしてくるかのようだ。
「こういうの、気持ちいい？」
二つ目の問い掛けに、青年はぎこちない首肯。口を開けば、みっともない呼吸音が漏れそうで、息も半ば止めている。
バイト青年の純情さに、眞由美も気を良くしたらしい。
「本当に可愛い……。ふふっ、免疫を付けるためだもの。ちょっと大胆な責め方も試してみるわね？」
その予告に、正太郎は頭を殴られた気がした。
真面目な彼も、オナニーぐらいやっている。扱く気持ち良さは、よく知っていた。
だが、眞由美の愛撫はささやかな動き方でありながら、絶頂へ向かう彼の手つきより、さらに存在感がある。
膨らみの外縁を軽くなぞったり。玉袋の上で指の腹を滑らせたり。この時点で、蕩けそうにくすぐったいのだ。
――所長ほど美人で色っぽければ、男性経験も豊富なのだろう。
淡い切なさが、正太郎の中に浮かびかけた。だが、心地よさは脳内まで揺さぶって、とてもまとまった形を保てない。

肉竿もさらに膨らもうとしていた。ズボンとボクサーパンツ、二重の衣服に押さえ込まれて、根元から捩れそうだ。
ペニスの角度を正したくて、正太郎は咄嗟に尻を前後へ滑らせた。
それを察したのか、眞由美がいとも無造作に、ズボンのファスナーを降ろす。
ジーッと金属の擦れる音。同時に股間部が軽くなった。
「う、ぁっ……！」
正太郎も隠しておきたかった呻きを、情けなく漏らしてしまう。
恥ずかしかった。股間部をさらけだすのも、声を聞かれたのも。
そのくせ、男性器は拘束されていた分を取り戻すかの如く、一気に肥大化だ。
さらに眞由美は、青年のベルトのバックルとズボンのホックも、躊躇なく外していった。
残るボクサーパンツは、伸縮性を発揮して肉幹に密着している。対する亀頭も最大サイズとなり、ゴムが縫い込まれた下着の縁を、グイッと持ち上げようとしていた。鎌首のような輪郭までが、すでにくっきりだ。
そんなグロテスクな部分を、眞由美はたおやかな人差し指で、ツンツン突き始める。
「は、う、うっ⁉」

もはや正太郎は、唸るのを止めきれない。
ズボンがどいたために接触はより鮮明だし、絶妙な力加減も変わらず。指の腹がぶつかるたび、ペニスは小刻みに痙攣し、それを見下ろす眞由美は、さながらお気に入りの玩具を見つけた牝猫だ。
「……思っていたより、ずっと大きいのね……」
「所長、そろそろ教えてください……っ。どこまでやるんですかっ……?」
羞恥を堪え、かすれ声で問う正太郎。このままでは下着を穿いたまま、指戯だけで精液をまき散らしかねない。
現に鈴口は緩み始めて、布地にジンワリと我慢汁の染みを作っていた。
なのに、眞由美はまだ教えてくれない。ボクサーパンツの縁を持ち上げて、いっぺんに足の付け根までズリ下げる。
「うあっ!?」
青年の股座を隠す物は、皆無となった。
出てきたペニスは特大サイズ。反っくり返った竿は、ゴツゴツ節くれだって、絡まる血管の太さまでが逞しい。
亀頭は丸々と先端に至るまで太いし、左右に張り出すカリ首は、矢の返しと似た危

険な形。根元では、陰毛がモジャモジャと捩れ合っている。
「ぁ、ふっ……」
巧みに責めていたはずの眞由美までが、気圧されたように息を飲んだ。もっとも、彼女はすぐに調子を取り戻し、遅れていた答えを吐き出す。
「どこまでやるかって……ふふっ、君がイクまでよ。それと……」
腹の方へ倒れていた肉幹を、眞由美は唐突に、右手で掴んで引き起こした。ここまでの焦らすような接触と違う、荒っぽい動き。瑞々しく張った指と掌も密着させてきて、青年の中に蟠(わだかま)っていた悩ましさを、凶暴な疼きへ激変させる。
「くぅうっ!?」
正太郎は腰周りを硬くしてしまう。ただし、四肢の踏ん張りは全然利かず、ソファーからずり落ちかけた。そこへ眞由美の誘いの続きが飛んでくる。
「正太郎君、エッチしている時は、相手を名前で呼ばなきゃ……ね?」
「は、い……! 眞由美さん!」
「よく言えました」
正太郎が応じれば、ご褒美さながら、眞由美も肉棒を扱き始める。しかし指先だけでさえ、危険な快楽は量産されたのだ。筒状になった手が上下した刹那、正太郎は高

圧電流でも流されたように、神経が痺れた。
「うあっ⁉　あぁうっ⁉」
「しばらくはイカずに頑張ってね。スパイに失敗しちゃった正太郎君？」
まるでこれは拷問に耐えるお勉強でもあるのだとばかり、女探偵は言葉で意地悪く嬲ってくる。
手コキは次第にスピードアップ。それを手伝うように、スベスベしていた掌へ、我慢汁が纏わりついていく。音はブチュブチュと粘っこく、感触の卑猥さもうなぎ上りだ。しかも。
「やだ……ヌルッて滑っちゃいそうよ……」
逃がすまいと言いたげに、握る力まで強まった。おかげで竿の全方位から、重みが加わる。
眞由美の手は下まで行くと、牡肉の表面を張りつめさせて、痛いほどの疼きを練り込んだ。
上った時にはエラへ衝突し、火花が散るような肉悦を生んだ。
さらに何度か止まっては、極太の竿を揉む動き。ピストンで刺激が切り替わるのも強烈だが、一つの場所に留まられると、快感は同じ形のまま強まっていく。

「あ、う、くぐぅっ!?」
入り乱れる官能の渦に、もはや何をされているかも分からなくなりそうな正太郎だった。
彼はのけぞりながら、唇のみならず、目も閉じる。ソファーの上で、両手を握り拳に変える。
ここまでしなければ、射精を防ぎきれないのだ。まだ扱かれ始めて、二分かそこらなのに。
とはいえ、耳までは塞ぎきれない。
「ふふっ。優しかったお兄さんが、おちんちんにこんなことされてるなんて……野呂君も井上さんも、夢にも思わないわよね?」
「う、ぎっ!?」
「あはっ、おちんちんが大きく跳ねたわよ、正太郎君?」
正太郎は歯を食いしばりながら、首を横へ振る。なのに、眞由美も容赦ない。
「ほら負けないで、正太郎君っ。これはお勉強なんだから、まだまだイッちゃ駄目なのよ?」
手コキに捻る動きまで加えてくる彼女。竿の皮が捩れれば、まるで着火するかのよ

うに、芯への刺激も倍加する。
正太郎は汗をかきながら、今にも昇って来かねない精液を、尿道の奥へ押し込もうと踏ん張った。
しかし、もう長く続くとは思えない。切迫感は凶悪で、心臓を破裂させてしまいそう。
むしろ、無理にイクまいと足掻くせいで、限界以上の子種が集まってきた。
達する瞬間、果たしてどれほどの快楽が突き抜けていくのか。それなりに度胸がある彼も、空恐ろしくなる。
だが、眞由美は意地悪な責め役に徹するつもりらしかった。
「駄目よ、駄ぁ目。もうちょっとだけ頑張ってみて？」
右手をそのままに言いながら、隣へ腰かけてくる。
女体でソファーがたわめば、正太郎もそちらへ傾きかけた。視覚を封じている彼にとっては、美女の体温が鮮烈だ。
さらに女探偵は、青年が着ていた半袖シャツのボタンを、左手だけで器用に外し始める。
「待って、ください……」

「うふふ……却下。正太郎君をもっとあられもない格好にしてあげる……」
なすすべもなく服が乱されていった。
そして半袖シャツを開き切った眞由美は、下着のシャツまでたくし上げてしまう。
「あ、女の子みたいに乳首が勃ってるのね……。見た目は逞しい男の子なのに」
羞恥を煽るセリフを吐くや、顔を胸板へ降ろしてきて――。
「んむむっ、んぅえろ……っ」
新たに開始されたのは、痴女のような乳首舐めだった。
掌と違い、舌先はヌルヌル濡れながら、淫靡にザラついている。これをのたくらせ、ヤスリのようにも使うから、転がされた乳首へは過剰な痺れが殺到した。しかも五秒、十秒と継続される。
「う、ぎ、くぅううっ!?」
ペニスがここまで感じることすら知らなかった初心な青年なのだ。乳首舐めの感触は、正しく衝撃だった。
今にも乳首がパンクしそう。しかし、踏みこたえようと意識をそちらへ傾ければ、途端に巨根が爆ぜかける。
眞由美は一旦顔を上げ、左手で濡れた乳首を捏ね捏ねしながら、

「正太郎君って、胸まで初々しいのね？」
「は、くおっ！」
恥辱に尿道を絞るが、舌遣いもすぐ戻ってきて、さっき以上に唾液を塗りたくっていく。
かと思えば、眞由美は艶っぽい唇で、吸引まで加えてきた。尖りきった性感帯をさらに引っ張りながら、舌による往復ビンタ。軽く叩かれるだけでも、突起の疼きは爆発的だ。
「んぇ……おっ、あぉむっ……んふぁあお……っ」
おおげさに響く籠った声は、眞由美流のオマケだろうか。さらについでとばかり、ペニスが左右へ振り回される。
上から下から、急所をピンポイントで追いつめる波状攻撃に、正太郎は声も子種も、止めきれなくなった。
「で、出る！　もう出ます！　眞由美さん……俺、限界なんですっ、すみませんっ、イクぅうっ⁉」
無様に悲鳴を上げたことで、精液の質感を余計に意識してしまう。腹筋の収縮も、肉竿の底へ力を送ることになった。

ドクン！
子種が竿の途中までせり上がってきた。粘膜の道が、乱暴に押しのけられる。
本当にこれ以上は無理だ。
「出ます！　所ちょっ……うぐ、うっ……ま、眞由美さぅうんぅうっ！」
すると、いきなり眞由美の声音が変わった。
「ええ、いいわっ。んっ……初めてなのに、頑張ったわねっ。もう好きなだけ出していいの……っ。私で……イッて……っ……！」
さんざん苛めてきたくせに、ここで甘やかすセリフ。さながら飴と鞭だ。しかも彼女も本当は昂ぶっていたかのように、口調へ懇願の色を混じらせる。
青年は容易く酔わされて、最後の歯止めも消しとんだ。
「い、ク……ぅうぅっ！」
こみ上げるエクスタシーに、意識まで押しつぶされる。
そこで急に、女探偵が空いていた左手を亀頭へかぶせた。
「う、いぎっ⁉」
「正太郎君っ、服に飛ばしたらまずいでしょ……っ？　ほら、ここに出してっ」
精子を受け止めることが、彼女の目的らしい。しかし、右手の動きもそのままなの

だ。
律動によって開閉させられる鈴口は、自然と掌で撫でくり回された。
上乗せされる喜悦。牡粘膜へ焼きつく疼き。
「眞由美さんっ、それっ、それはぁおぉうっ⁉」
達しかけたところで、さらなる凄まじさのエクスタシーへ叩き上げる一押しだ。
白濁も残った距離を瞬時に突っ走り、尿道を擦りながら、ビュクンッ、ビュクンッ、ビュクンッ！　砲弾さながら打ちだされて、美女の左掌へ絡まった。さらに勢い余って、指と指の隙間へも。
粘度も、栗の花に喩えられる匂いも、とことん濃密だ。もう、ちょっとやそっとでは、眞由美から離れそうにない。
だが、女探偵も肌を汚されながら、うっとり喉を鳴らしていた。
「あん……正太郎君、こんなにいっぱい出すのね……っ。んふっ、熱い……ぃ」
彼女は左手を滑らせ続ける。右手は残った液を搾りだすように、下から上へ最後の一扱き。
「ぐ、う、ぅううあ……⁉」
感度が振りきれたところへ追い討ちをかけられて、正太郎はつぶったままの目尻に、

涙が浮くのを感じた。
手コキだけなのに気を失いそうで。そのくせ刺激の強さに、意識は繋ぎ止められる。
正太郎は悦楽の奔流に苛まれながら、あっという間にイカされたのを嘆くことさえ、許されなかった。

そして三分後。
「どうだったかしら。……私、悪乗りしすぎちゃった？」
眞由美が自身の両手をティッシュで拭きつつ、聞いてくる。
正太郎は即答できず、閉じたままだった瞼を上げた。
視界に入ってくるのは、白っぽい天井だ。年季の入った色合いが、目くるめく愉悦と対照的で、夢から覚めたような心地になってくる。
とはいえ、身体を動かす気にはなれない。憧れの女性を前に、ボロ負けの気分だった。
四肢を投げ出し、呼吸に胸を上下させて――。
ただし、ぼんやりと目を下半身にやったところで、気持ちが動いた。
若い肉竿は、今も屹立したままだ。先走りとザーメンで濡れ光りつつ、あっけなく

イカされたことへのリベンジをしたがっているみたい。
（我ながら……無節操だよな……）
惨めさが薄れ、何だかおかしくなってくる。
考えてみれば高校時代も、柔道の試合で負けることが多かった。醜態を晒すのには慣れているはずだ。
「……いいえ」
「え？」
短く答えると、質問から間が空きすぎていたらしく、眞由美に聞き返された。
だから、身を起こして彼女に宣言する。
「俺……次の指導があれば、もっと粘るつもりです……っ」
「ふふ、男の子ね……」
眞由美が口元を緩めた。
「じゃあ、今から二戦目もやってみる？」
その提案に、正太郎も深く座り直した。
「ええ、お願いします！」

――二回目は最初と比べて、十秒ほど長続きした。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……ふぅうぅ……っ！」

またも正太郎は、エクスタシーの余熱に浸りながら、天井を見る羽目になった。

やっぱりやる気だけでは、経験の差を乗り切れない。

とはいえ、ペニスは二度達してもまだ、ギンギンの力強さを残している。

それに心の準備が出来ていたためだろう。さっきのような無力感はなく、目だけを動かして、眞由美の反応を見ることが出来た。

「うぁ……」

間抜けた声が漏れてしまった。

女探偵は隣に座って、男汁にまみれた自分の両手を見下ろしている。

目線はトロンと潤み、思った以上に淫猥だ。唇も半開きで、さっきまで乳首嬲りに使っていたからか、端がヌラリと唾液で濡れていた。

彼女は青年の視線に気付いていないらしい。あやとりでもするように指を動かして、ニチャニチャ糸を引くザーメンの感触を確かめている。

「ぁあ……正太郎君の……」

何かを求めるような、上ずり声までまろび出た。まるで続けざまに精液の匂いを嗅いで、女芯へ火が点いてしまったみたいだ。
「眞由美さん……？」
思わず声を掛けると、彼女はビクッと飛び跳ねるように顔を上げる。
「あ、え、ええと……」
ソワソワ視線を彷徨わせて。それでも青年が見つめ続けると、小声で尋ねてきた。
「君のも全然小さくならないし……締めにもう一回、抜いておく？　こ、今度はアフターフォローよ。もっと甘めの雰囲気でいくから……安心して？」
「……はいっ」
口調がごまかし気味なのは気になったが、正太郎に異論がある筈もなかった。
即座に頷かれて、眞由美は再び手を拭う。そうして粘り気の取れた指先で、スーツのボタンを外し始めた。
衣服が開けば、バストの大きさも一層際立つ。白いブラウスを押しのけんばかりに丸みを描き、見るからに重たそう。
しかも眞由美はスーツの袖から腕を抜くと、ブラウスまで脱いでいった。ボタンを外す順番は上から下へ。

「正太郎君……見られていたら恥ずかしいわ」
ずっと青年をリードしてきたくせに、視線に気付くと、服の合わせ目を重ねてしまう。もしかしたら、これも『甘めの雰囲気』作りの一環なのかもしれないが、
「は、はいっ」
正太郎は急いで目を背けた。だが、衣擦れの音が耳に入ってくるので、ついつい窺いたくなる。
チラッと視線を戻せば、女探偵がブラウスの下に着けていたのは、淡い紫のブラジャーだった。レースで飾られた、アダルトながらも卑猥ではないデザインで、ひたすらデカい。青年が咄嗟に連想したのは、パンパンに張ったビーチボールだ。
ただし、上から覗く乳房の端は、ビニールなんかと比較したら申し訳ないぐらい柔らかそうだった。たぷたぷっと丸っこく、軽く触れるだけでもたわみかねない。
「ん……」
眞由美は微かに喉を鳴らしながら身を傾けて、背後へ手を回す。下着のホックまで、迷わず外してしまった。
カップがどかされれば、もう上半身を隠す物は何もない。むき出しになった色白バストは、まるできめ細かなクリームを盛り上げたように愛らしい。ブラジャーで守ら

れていた時と変わらぬ形を保っている。
それどころか。戒めから解き放たれたのを喜ぶように、一回り近くも大きくなって見えた。ずっしり重たげで、周囲へ薄く影が出来ている。
突端にある乳首は、ミルク多めのチョコレートめいた色合いだった。すでに尖りきって、下の膨らみと反対に、相当な弾力を宿していそう。
乳輪は大きめの気もするが、そもそも正太郎には、他の生身の女性と比較できる経験がない。少なくとも形は整っていて、真円に近かった。
（何をしてくれる気なんだ……!?）
ここまで脱いだ以上、手コキだけとは思えない。純情な青年は興奮と共に、慄きめいたものまで感じてしまう。
その時、眞由美が視線に気付き、甘えるように眉根を寄せた。
「恥ずかしいって言ったのに……もう……」
そっと挙げた右腕で、二つの乳頭を隠す彼女。とはいえ、巨乳全体を覆うのに、腕と手だけでは、到底足りない。むしろ、手ブラに圧されて乳房が凹み、柔らかさが存分に発揮された。青年の脳内では、たった今見たばかりの乳首も、しっかり再生される。

「眞由美……さん……」
正太郎は喘ぐが、雇い主の名を呼ぶ声が、自分のものではないみたいに、遠くから聞こえた。
眞由美の方は急かされたと解釈したようだ。嫣然と微笑んだ後、滑るようにソファーから降りて、再び青年の前に跪く。ペースも完全に戻り、隠したバストの上から、右手をどけた。
「最後は胸を使ってみるわね？　君の大きなモノ……ここで挟んであげる」
眞由美の声音は、あやすように優しい。
しかし正太郎は顔から火が出そうだった。昨日からずっと巨乳を気にしていたことを、言外に指摘された心地。
青年があたふたと脚を広げれば、眞由美は両手ですくいあげるように、巨乳の谷間を開いた。そして膝立ちのままで半歩前進。上半身も倒してきて――。
ムニュリッ。
左右から寄せた巨乳で、持ち主の腹へくっ付く寸前の極太ペニスを、危なげなく挟み込んだ。
「あ、うぅうっ⁉」

正太郎の屹立は一瞬のうちに、底なしの柔らかさと温もりで埋め尽くされる。
見下ろせば、バストは掌で圧されるがまま、平たくひしゃげていた。側面が潰れた分は、縁がはみ出す格好だ。当人がその気になりさえすれば、どこまでも伸びそうな変形ぶりで、亀頭の丸みにも、エラの窪みにも、肉幹の硬さにも、隙間なくフィットする。外へ逃したのは、子種で白っぽく彩られる鈴口周りのみ。
見ているだけで窒息しそうなボリュームだった。
まして、押さえつけられたペニスの方は、感度を研ぎ澄まされたままなのである。エラなんて、痺れが神経の外まではみ出そう。
にもかかわらず、のぼせそうな心地よさも、青年は感じ取る。
手コキがスピード感を伴う急流下りだとすれば、こちらはまるで温かい湯船に浸っているみたい。額にも新たな汗がジンワリ浮いた。
だが、恍惚となっているのは、正太郎だけではなかった。
「ああ……すごい……精液の匂い……ん、私、こんなに近くで嗅いでる……」
眞由美までが幸せそうだ。彼女はそのまま、牡肉の硬さを堪能するように、手の力を変え始める。精液をクチュクチュとすり潰しつつ、軽く圧しては、また緩め。
小手調べのような愛撫が繰り返されて、青年を見舞う快楽に、寄せては返す変化が

生まれた。
「気持ちいいです……眞由美さんの胸……」
「だったら……こういうのはどう？」
次いで眞由美が開始したのは、ピアノを弾くみたいに十指を跳ねさせる動き。弄ばれた巨乳も元に戻ろうとして、特大サイズが丸ごと波打つ。
甘美な振動は、肉幹の芯まで押し寄せた。乳肉は弾力たっぷりで、次の一瞬でどうなるかなんて、きっと眞由美にも読めないだろう。まして正太郎に予測できる訳がない。ぶつかってくる不規則な揺らぎは、振りきれそうにこそばゆかった。
「もっと、強くして、いい……？」
興奮混じりの確認に、正太郎も喘ぎながら頷いた。踏ん張り直すと、ペニスは角度を鋭くし、自分から柔肉を擦り返す。
「あ、ン……や、ぁふっ……ヤンチャなおちんちんっ……」
眞由美は両手の力を強め直した。ペニスをギュッと挟んだら、右のバストをズリッと上げる。逆に左の方は押し下げる。正太郎から見れば、肉棒を斜めに傾けさせられる格好だ。
「つぅうっ!?」

エラの片側が疼くと同時に、反対側では亀頭を磨かれた。ザーメンの粘りがあるから、まるで粘膜を引っ張られるみたい。竿の内では、尿道のむず痒さがまた上がる。

正太郎がそれらの喜悦を飲み下そうとするうちに、今度は逆の動き方。右胸が下へ走り、左胸はカリ首を捲る。向きをそっくり入れ替える愉悦も、青年はがっつくように味わった。

「眞由美さんっ、この動き方もっ……いいです！　俺っ、もっとしてほしいっ……！」

「あふっ……喜んでもらえると……ん、張り合いが出て来るわ……っ」

求められた眞由美は、踊るようなテンポで、乳肉を交互に動かす。精液の残滓もどんどん広げられて、美乳を穢していった。そこへ新たな先走りと、互いの汗まで加わって、愛撫はじわじわペースアップだ。濡れた音も高まっていく。

「は、ん……ぁ、ぁあっ……正太郎君……はぁぁ……」

触覚を刺激されたのか、あるいは牡の匂いが好きなのか、眞由美も息遣いを荒くしてきた。

女性の感じる声なんて、正太郎は今まで生で聞いたことがない。

もっと聞きたい、大きく響かせたい——直感的な欲求に、彼は腰を上下へ揺する。それは無意識の動きだったから、振れ幅も大きくはない。だが、貪欲さが滲み出てい

た。
「やンっ！」
眞由美のパイズリも煽られたように変化だ。今度は左右を別々に使うのではなく、揃えて急上昇させる。
解放された竿の付け根は、いっぺんに軽くなった。ただし格段に感じやすい亀頭が、乳の谷間にすっぽり埋まる。もう鈴口も無事では済まず、蒸されたように熱くなる。
「正太郎君、もっと気持ち良くなりたいのね？」
女探偵がねちっこく笑った。
そのまま、強弱付きのマッサージ。動き自体は出だしでやったものの再現だが、今度は肉棒の切っ先に集中だ。乳肉と一緒に亀頭が歪み、張り出すエラも変形させられそうに疼いてしまう。
「あ、く、うっ……俺っ……眞由美さんにも感じてほしくて……んぐっ⁉」
言い返そうとすると、圧力はさらにきつくなった。
「焦っちゃ駄目……。今日は初めてなんだから……私に任せて、ね……？」
緩やかに思えたパイズリも、相手の気分で過激に変わる。青年へ身の丈を教え込むように、緩急は加わり続け、それに引っ張られて、精液までがざわつき始めた。

正太郎は浮き上がりそうな腰を、懸命にソファーのクッションへ押し込み続けた。子種も竿の底へ留めようと足掻く。

そこへ二つ並んだバストが、下降してきた。膨らみの谷間もフルに使われ、亀頭と竿を擦り立て、仕上げに丸みの端が、平たく歪む勢いで、陰毛の生え際へ衝突する。

「は、うっ⁉」

少年が息を吐く間に、眞由美は下を向き、泡立つ唾をトロリと垂らした。

狙いは正確で、亀頭の先を直撃だ。液にも重みが乗っており、出来上がっていた精子の膜と同化しながら、鈴口の奥まで侵す。

正太郎からすれば、唾を垂らされるという立場も、ひどくマゾヒスティックに思われた。

攻めはまだまだ終わらない。

再びカリ首を裏返しそうな勢いで、駆け上りだす眞由美。バストは特大だし、嬲られる竿の方も長いから、摩擦はたっぷりと続いた。

いや、終わらないどころか。

「あ、お、おおっ⁉」

精液の出口まで包囲しきった後は、本格的な往復が開始される。

下がって、上がって、また下がって。
乳房も卑猥に変形し、全体が下る時には肉竿へ絡まるように、谷間だけを浮かせた。昇れば、その合わせ目が内側へ巻き込まれる。しこる乳首も周囲を見回すように、ウネウネと場所を変え続けた。
一応は約束通り、動きに優しさが残っているものの、それでも射精を堪えるのは難しい。青年は竿を引き締めながら、徐々に崩れていく足元をイメージさせられる。安全な場所を探したくても、周囲はことごとくドロッとした肉悦の海だ。
逃げられない。後ちょっとで呑まれてしまう。
「ん、くっ！」
眞由美がペニスへのしかかるように、体重をかけてきた。前進した乳首は、正太郎の股座へ引っかかり、薄い皮をくすぐってくる。柔らかい奉仕の中に、少し硬いものが混じるだけでも、かなりのアクセントだった。
しかもその衝突で、眞由美も声を揺らがせている。
「ん、や……大きなおちんちん、ガチガチで……ぅンっ、正太郎君がイキそうなのを我慢してるって分かるのっ……んあ、あっ、あはぁんっ……」
男と押し合うたびに、乳首はもげてしまいそうに捩れた。上へ、次いで下へも。

彼女は意図的にそれをやっているらしい。青年を弄びつつ、ちゃっかり自分の快感まで増しているのだ。

挙句、腰のしなやかさを活用し、横向きの動きまで。引っこ抜くように肉幹を揺さぶりながら、汗ばむ裸の肩も、スカートに包まれたままの尻も、一緒に振っていた。

「正太郎君……このまま出してっ……精液の匂い……また嗅がせてほしいのぉっ……」

いつの間にか、縦の振れ幅も増していた。昇りきった乳房は、鈴口より上で合わせ目をぴっちり閉じてから、滝の水さながらに落とされる。

牡粘膜はそれを強制的に切り開かされた。今にも燃えだしそうな擦れ合い。

そこへまた糸を引きながら、唾の塊が襲来だ。ベチャリッ。

「うあっ！　あぁうっ！」

正太郎はソファーへ肩と尻を擦り付け、握り拳を震わせていた。だが決壊の時はどんどん近づく。

「出ます！　くあっ！　お、俺……もうイキますっ！」

「うんっ、出してっ！　私を汚してぇえっ！」

眞由美はとどめを刺すように、顔を亀頭へ伏せてきた。ちょうど出てきた粘液まみ

れの鈴口へ唇を密着させると、肉竿をストロー代わりに、
「んぶっ、ずずぅうっ！　じゅずずずぅうっ！」
空気を響かせながら、思い切り吸い上げてきた。
「んぎ、ぃぉおぉおっ⁉」
荒れ狂う愉悦と混乱に、正太郎は脳天を揺すられる。
吸い付く粘膜は、手とも乳房とも違う、第三の感触だ。
何より、眞由美が麗しい唇を、ここまで卑猥に使うのが驚きで。
過度の喜悦によって、白い濁流も肉竿を一気に遡った。三回目とは思えない勢いで体内粘膜をなぞったら、狭められていた眞由美の口へ突進していく。
「んっ、ぷぶっ⁉　ひうぅうっ⁉」
あまりの量に、眞由美でさえ驚いたらしい。肢体をビクッとわななかせ、強張る両手でバストへ急激な圧迫をかける。
それに煽られ、巨根も最後の一打ち。逃げるように浮きかけていた眞由美の唇へ、グチャッとスペルマをへばりつかせた。
「はっ……はっ……はぁぁっ……」
「ん、ふ……は、はぁぁ……っ、ぅ、ぇ……ぁぁあ……」

今や、探偵事務所内には生臭さが立ち込めて、響くのは荒い息遣いのみだ。
眞由美もかなりの気力を使ったようで、床へへたり込んでしまう。
だが、弛緩した空気の中で尚――ペニスだけは頑丈な柱の如く、隆々とそそり立ち続けていた。
成り行きによっては、第四ラウンドも余裕でイケそうだった。

面接を受けたのが月曜日。手コキとパイズリは水曜日。
正太郎の三度目の出勤は、金曜日だった。
この二日間、青年はずっとソワソワし通しで、友人からも不審がられてしまった。今までストイックだった分、反動は大きい。ことあるごとに眞由美の顔が目の前でチラつく。
講義が終わるのも待ち遠しくて、午後はわき目もふらずに、大学から雑居ビルへ直行した。階段を上がる時になると、ほとんど駆け足だ。
しかし、正太郎だって分かっていた。眞由美には雇われているだけで、手コキもパイズリも、学部長への変則的な口止めに過ぎない。
だから事務所前に着くと、敢えてドアノブを握らず、大きく深呼吸をする。鼓動が

普段の調子に戻るまで、一分近く待った。
「……」
――そろそろいいだろう。正太郎はごく普通のバイト青年の顔を作って、ドアを押し開ける。
「おはようございますっ」
「はい、おはよ。今日も元気ね、吉尾君」
眞由美が所長の机の向こうから、余裕ある笑みを返してくる。呼び方も『吉尾君』に戻っていた。
極めて常識的な態度。正太郎も自分の判断が正しかったのだと確信する。
そこで眞由美は席を立ち、一歩一歩近づいてきた。
（え？　お、落ち着け、落ち着け……！）
念じる青年に、女探偵は一枚のメモを差し出して、
「君の携帯の番号を教えてほしいって、井上さんから電話があったの。これはあの子の番号ね？」
「は、はあ」
「本当に良かったわ。恨まれたままで終わらなくて」

確かにその危険は高かっただろう。しかし正太郎は安心する以上に、眞由美との近い距離でドギマギしてしまう。

そこへにこやかに次の言葉。

「今日はストーカー対策の依頼が入っているのよ。気を引き締めていきましょうね、吉尾君」

「っ……はいっ！」

内心の浮つきを見抜かれたようで恥ずかしく、正太郎は直立不動の姿勢を取った。

そんな彼だから――。

眞由美が一回だけ切なげに息を吐きかけたことにも、椅子へ戻る寸前、頬がほんのり赤らんでいたことにも――全く気付けなかったのである。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/